

誌四十四號に掲載せる花鳥文大平鉢に比して型も小さく、従つて豪放磊落の趣を缺き、その作行及ばずとするも、焼成の堅固に、その文様、描法の妙、賦彩の精に古九谷の本質を發揮し盡した典型的の一遺品としても亦見るべきものであらう。(中川)

### 二、三 山越阿彌陀圖

大阪 上野理一氏藏

絹本着色 挂幅裝

横 一〇・九寸(三寸九分八分)  
八五・五寸(二尺六寸五分)

(豊岡益入「山越阿彌陀圖考」参照)

### 四 楊月筆 瓜、筍圖

和歌山 寶壽院藏

紙本墨畫

挂幅裝二幅

各幅 一四・〇寸(三尺七寸六分)  
三九・八寸(一尺三寸一分)

鶯に楊月の渡宋天神圖本誌第四十三號を掲げてその跡を窺うた。茲に又瓜筍圖を載せて彼が正風を忍ぶ。瓜は圖を構へるにかの呂敬甫の様を享けて、蔓を配し花を加へ、更に一二の小果をも添へたが、筍は今し後園より採來つた様で、戢々たる二束を無雜作に置いて新香の四邊に泛ふを覺える。蓋し兩者共に當代禪林の日常に甚だ近きものなるが上に、瓜はかの邵平の青門瓜の遺事を傳ふる宋元以來の畫題、また筍は宋に筍譜の撰があり、我にも宜竹、彦龍等の煮争經の詩を存して當代の蔬果圖中の好畫材だつたのであらう。

楊月筆筍圖印記(原寸)

それにしても楊月は果して何處からこの滋潤の墨法を獲來つたものか。沒骨風の果蔬の法は早く我國にもその流を傳へたるもの、就中瓜の枯葉に見る焦墨を點抹した様は正しく所謂牧溪風の敗荷に學んだものと思はれるが、筍、瓜葉等の寧ろ無雜作な墨暈、さては彼の最も意中の技と思はれる一面の外暈は、恐らく彼が寫生

中に得來つたものであらう。籜頂、瓜蔓、束繩の類の輾筆の用線も亦彼の獨自

の風である。就中、瓜圖に於いては或はかの道安の落想に一籌を輸するにしても、束筍の殊興に至つてはまた従ふものなく、以て時流の外に自適せる楊月其人の抱懷を見るに足るであらう。

尙この雙幅にはもと中に猿猴を存したと傳へる。知らず、この三幅一對の圖に寓するところは果して何であつたであらうか。(渡邊)

### 五六 大雅、蕪村筆十便十宜圖 山口 榑谷音三氏藏

紙本着色

册子裝二册

各幅 一七・九寸(五寸九分)

横 約一七・九寸(五寸九分)

(脇本十九郎「十便十宜畫册小攷」参照)

### 七 孔雀文磬

東京 淺野長武氏藏

銅造

中央高一二寸(三寸九分六厘)

下邊横二〇寸(六寸六分)

重量三三〇瓦(八五・三匁)

形式は一般磬に見る如き山形をなすが、上邊の三孤線の聯がり素朴に、兩袖の張り、裾の踏張りも強くなく、全體的にやはらぎ氣味な型をなしてゐる。そして表面には八葉蓮華文の撞座を中心に之を挟んで左右相對の孔雀が胸を張り翅を擴げて立てる様を鑄出し、裏面には同じく八葉蓮華文の撞座を中心に、左右に正側兩面を交へた蓮葉及び水とおぼしき數條の線を鑄出した蓮池文がある。全體の形式に加へて、縁取り、文様の配置等にいかにも無雜作な構へが見られ、磬に通有な堅硬と織巧さを缺く嫌ひはあるが、それは却つて面白味を増し、且つ全體の肉取りのよろしき、鑄肌の潤澤なる味も加はつて、言はゞ陶器に於ける手捏の如き自由にして磊落な構へを現はしてゐる。而して之に配せられた孔雀の尾も重たげに胸高々と張り朗音一聲せるかの如き寛裕なる姿は磬全體の趣致に一層の品格を備へしめてゐる。裏面の蓮池文はその意匠簡素に、恰も能畫家が筆をもつて素描をやつた如き卒意な篋當りの妙が窺はれ、蓮葉の輪廓には直筆的な篋、葉脈を表はすところには側筆的な篋を用ひたのであつて、工藝的な繊細巧緻の技に捕はれることなくよく體との渾一を得てゐる。要するに本